

第 10 回尖石縄文文化賞

受賞者:三上徹也

尖石縄文文化賞条例にもとづく同賞選考委員会は、柳平千代一茅野市長の諮問を受け、8月24日尖石縄文考古館で行われた。

今回、選考・審査の対象となったのは、個人・団体延べ13件であった。候補者の内訳は、40歳代から60歳代におよび、所属機関や研究歴は多彩で、「受賞の対象となる研究及び活動の業績」についても、宮坂英弐が尖石遺跡の発掘と研究を通じて目指した縄文時代の歴史の本質に迫るすぐれた研究と活動を示すものであった。このことは、本年第10回目を迎えた本賞の趣旨が、広く学界等一般に周知された結果として誠に喜ばしいことである。

こうしたすぐれた候補者を得て、選考委員会において慎重な審議を行った結果、第10回尖石縄文文化賞の受賞者として、三上徹也氏（長野県）を、全会一致で推薦することに決定した。

同氏は中部高地の縄文時代資料の精緻な分析を続け、考古学的資料から縄文社会論に迫るとともに、在野の研究者として地域に密着した考古学普及活動を実践している。

特に、地域の考古学研究者の協力を得ながら地道な研究を続け、曾根遺跡発見100年の節目にあたり、『諏訪湖底曾根遺跡研究100年の記録』をまとめたことは大きく評価することができる。

曾根遺跡は日本考古学黎明期に調査が行われたものであり、その後の研究において縄文文化草創期研究の重要かつ貴重な資料であることが判明した。しかしその資料は全国に散逸し、学術的資料としての価値を認められながら、長らく研究上の対象として取り扱われることがなかった。三上氏はこの研究により曾根遺跡研究の学史的な整理・研究を行うとともに、全国に散在した膨大な資料を集成し、現在の縄文時代草創期の研究資料として、考古学界に再び提示した。

この曾根遺跡の研究により、曾根遺跡のもつ重要性を改めて喚起したことは、縄文人の行動や社会生活を明らかにしようとした宮坂英弐の研究を継承・発展させたものであり、茅野市が本賞を制定した意義にそった、まことにふさわしい受賞者である。

2009年8月24日

宮坂英弐記念尖石縄文文化賞選考委員会
委員長 戸沢充則



第10回受賞者 三上徹也 氏